



インド便り



#1 2014

インド大使館

インド大使より



在東京インド大使館発行の季刊誌の第二号を皆様のお手元にお届けすることができ、嬉しく思います。今号を作成するにあたっては、友人の皆様からの第一号への御意見をもとに、いくつか変更を試みました。まず、日本の友人に向けてメッセージを送りたいという目的を果たすため、今号より本誌を完全な日本語版にし、雑誌名を付けました。日本には日印協会発行の「月刊インド」をはじめ、印日関係にまつわる最新の出来事を伝える刊行物が多数ありますので、本誌はニュースよりも、むしろ多くの特集記事をお届けしたいと考えております。今号より、インドにあるユネスコ世界遺産を一件か二件ずつご紹介します。第一回は、南インドのカルナータカ州にある、ハンピという再生中の古代都市についてお伝えします。

今季の最も重要な出来事は、2013年11月から12月にかけての天皇后両陛下の歴史的な御訪印でした。幸運なことに、森首相閣下が同行記を御寄稿くださいました。両陛下は1960年、皇太子・皇太子妃としてインドを訪問なさいましたが、日本の天皇后両陛下が国賓として訪印なさるのは、印日関係史上初めてのことでした。今号では、プラナブ・ムカジーインド共和国大統領主催の晩餐会にて天皇陛下が御挨拶中に語られた、インドと日印関係についてのお言葉もご紹介します。インド国民は両陛下をたいへん温かく御歓迎申し上げます。両陛下の訪問により、印日両国と両国民を結ぶ緊密な関係はさらに深いものとなりました。

また同様に歴史的な出来事としては、2014年1月26日に開催された共和国記念日式典のパレードに主賓として参加なさるための、安倍首相の御訪印がありました。これもまた印日関係の歴史において初めてのことでした。安倍首相と、同行の昭恵夫人は過密なスケジュールの中、様々な会談や行事に御参加なさり、インド側の面会者に深い印象を残されました。

本年はインドの精神的指導者、スワミー・ヴィヴェーカーナンダと、スワミーが1893年に来日した際に友情を育んだ著名な学者、岡倉天心の生誕150周年にあたります。これを記念して、この二人の知的世界の巨人と二人の交流についての記事を掲載しました。

インド料理がお好きな方々のために、これから毎号インド料理の作り方を一品ずつご紹介したいと思います。今号では、日本の皆様もお好きなマサラ・チャイの作り方を掲載しました。

本誌が皆様にとって面白く、役に立つ雑誌となることを願っております。本誌をより良い雑誌にするための皆様の御提案やご意見をお待ちしております。

皆様のご健康とお幸せを祈りつつ、

ディーパ・ゴパラン・ワドワ
駐日インド大使



Contents

- | | | |
|----|---|------------|
| 4 | 「天皇皇后両陛下のインドご訪問について」 | 日印協会会長 森喜朗 |
| 8 | 安倍総理大臣のインド訪問 | |
| 9 | インド共和国記念日レセプション | |
| 10 | 印日科学技術交流 | |
| 11 | 山陰インド協会 | |
| 12 | 海運大臣の来日
繊維大臣の東京・大阪訪問
JICA インド工科大学を支援 | |
| 13 | インド： 火星周回軌道探査機打ち上げ成功 | |
| 14 | 「シークレットが明るみに： ビクトリアズ・シークレット等の
アメリカの大企業 バンガロールの技術に関心を寄せる」
文：TNN シルパ・パドニス | |
| 15 | インドの世界遺産： ハンピの建造物群 | |
| 23 | 「スワミー・ヴィヴェーカーナンダと日本」
ヴェーダンタ協会 スワミー・メーダサーナンダ | |
| 26 | インド料理： マサラ・チャイの作り方 | |
| 27 | 「カレーの『改善』」 | サンジーブ・シンハ |

Published and Produced by
Diplomatist Magazine
an imprint of **L.B. Associates (Pvt) Ltd**
in association with
The Embassy of India, Japan

Disclaimer: Although all efforts have been made to ensure complete accuracy of the text neither L.B. Associates (Pvt) Ltd nor the Embassy of India, Japan can accept responsibility for consequences arising from errors of omission or advice given.

L.B. Associates Pvt Ltd. • Email: info@lbassociates.com • Website: www.lbassociates.com



天皇皇后両陛下のインドご訪問について

文：日印協会会長 森喜朗



インドのシン首相とクルシード外務大臣の出迎えを受けられた天皇皇后両陛下

天 皇皇后両陛下は、11月30日から12月5日までの6日間にわたりインドを国賓として御訪問されました。私は、大変光栄なことに、2005年の両陛下のノルウェー御訪問・アイルランドお立ち寄りに次いで2度目の首席随員を仰せつかり、この度の御訪問に同行させていただきました。今回の御訪問に首席随員として同行した私の印象を御紹介させていただきます。

天皇皇后両陛下にとってインド御訪問は、1960年に皇太子同妃両殿下として御訪問されて以来、53年ぶりのことでした。今回は、首都ニューデリーのほか、前回の御訪問ではお立ち寄りにならなかった南部の主要都市チェンナイを御訪問されました。これまでインドからは、1958年にブラサド大統領が国賓として訪日され、1989年の大喪の礼及び1990年の即位の礼に際してヴェンカタラマン大統領が訪日されています。この度、両陛下のインド御訪問が実現したことは、インドからの長年にわたる厚情にお応えいただくものとなり、これまで長きにわたり培われてきた両国国民レベルでの友好親善関係をさらに飛躍的に進展させるものと確信しています。日印協会の会長として、また、日印の友好関係を願う者の一人として、両陛下のインド御訪問が実現したことを大変嬉しく思っております。

天皇皇后両陛下におかれては、御結婚の翌年の御訪問以来のインド御訪問をことのほか楽しみにされていた御様子でした。今回の御訪問を通じ、両陛下は、行く先々で人々と丁寧に心を込めて接せられ、多くの人々に直接声をお掛けになり、半世紀ぶりに接するインドの文化や風物を熱心に観察しておられました。デリーのロディー

庭園及びチェンナイのギンディー国立公園において、両陛下はインドの市民との御交流を楽しんでおられました。ロディー庭園では、両陛下は、遠慮がち、戸惑いがちに市民の方に御自ら歩み寄られ、一人一人に丁寧に言葉をかけておられました。少女から花束を手渡された皇后陛下は、大変嬉しそうに少女とお言葉を交わしておられました。また、デリーのネルー大学でも、両陛下のお姿を一目見ようと集まった多くの学生たちとお言葉を交わしておられました。両陛下は学生たち一人一人に丁寧に声をおかけになり、学生たちの夢や希望、また日本に対する思いなど、彼らが語る言葉に耳を傾けておられました。

初めての御訪問先となったチェンナイでは、ヤシの木が茂る南国情緒ある街並みに、両陛下は改めてインドの国土の大きさと植生の豊かさ、文化の多様さを実感された御様子でした。インドの伝統音楽や伝統舞踊を教えるカラクシェトラ芸術学院では、学生たちによる伝統楽器の演奏に耳を傾けられるとともに、伝統舞踊バラタナティウムを学ぶ学生たちの演技を御覧になりました。また、同じくチェンナイにおいて御訪問されたタミル・ナド障害者協会では、一心不乱に紙コップを作る生徒たちの姿を真剣な眼差しで見つめられ、また、彼らが一生懸命に磨いた食器を実際にお手に取り、生徒たちに直接お言葉をかけられ、励ましておられました。

この度の両陛下のインド御訪問は、日本を離れ、厳しい生活環境の中で暮らしているインド在留の日本人の皆様にとっても大きな励みになったのではないかと思います。両陛下のデリー御到着の際には、宿舎前に約150人の在留邦人の皆様が集まって下さいました。チェンナイでも、多くの在留邦人の皆様に宿舎御到着を出迎え



大統領官邸で行われた歓迎式典で、儀仗隊を巡閲される天皇陛下

ていただき、中には感極まって涙を流す方もいたほどでした。両陛下のお立ち寄りになられる所には在留の日本人が多く待ち受け、感激の面持ちで日の丸の小旗を振る様子には私も感動しました。

デリーで御訪問されたニューデリー日本人学校では、約280名の児童、生徒が両陛下をお迎えしていました。両陛下は、小学6年生の児童による和太鼓の演奏と、中学生による「よさこいソーラン踊り」を御覧になられました。私にとっては、同校の理事長が、「祖国」という言葉を最も大切に教えていると説明していたことが大変印象的でした。両陛下は、住み慣れた日本や友達から離れ、生活面、学習面において、日本とは異なる様々な制約を受けながら、インドの地で、一生懸命日本の文化を学ぼうとする児童生徒たちの姿を、真剣な面持ちで、また時折目を細められながら御覧になっておられました。また、演技終了後、両陛下は御自ら生徒たちに歩み寄られ、上手ですね、どれくらい練習したのですかなどと一人一人に激励の声をかけておられました。日本人学校からの御出発の際、全校生徒が日の丸の手旗を振りかざして両陛下をお見送りしていましたが、両陛下は、本当に名残惜しそうにいつまでも手をお振りになられてお応えになっておられました。

今回のデリー御訪問は、両陛下にとって、53年前の御軌跡を辿る御訪問でもありました。両陛下は、インドを再訪できたことのお喜びの旨を折に触れて述べられるなど、半世紀ぶりのインド御訪問を心から楽しんでいる御様子が伺われました。天皇陛下は、ムカジー大統領主催による歓迎晩餐会でのお言葉の中で、前回の御訪問の際のブラサド大統領やラダクリシュナン副大統領、ネルー首相によるもてなしやレッド・フォートでの人々との交流の思い出について言及されるとともに、インド独立の指導者たちから、民主主義、国際主義、非暴力を旨としたガンジーの思想の流れをくむ平和主義を理想とする国作りへの高い志に触れたことに強く印象づけられた旨述べておられました。

12月1日には、両陛下はデリーの八木大使公邸を御訪問され、53年前に植樹をされた菩提樹を御覧になられました。両陛下は、高さ17メートルの立派な枝振りの大木に育った菩提樹をことのほか嬉しそうに見上げられ、また、53年前の植樹が、まさに同じ12月1日であったことをお聞きになると、今日がその日ですか、大

きくなりましたね、と大変感慨深そうな御様子でした。翌々日の夕刻に開催された八木大使主催レセプションの際にも、予定を変更され、ライトアップされた菩提樹を招待客とともに改めて御覧になっておられました。

ところで、この菩提樹の近くに、1メートル5～60センチほどに育っているピンク・トランペットの木があります。この木は、昨年春私が平林理事長を伴ってインドを訪問した際、当時の齋木大使のご厚意により、日印国交樹立60周年を記念して植樹したものです。両陛下のお植えになられた菩提樹とは比べるべくもありませんが、緑鮮やかな葉が風に揺れるピンク・トランペットを見たときには、60年の節目を経たこれからの新しい日印関係を象徴するものとも思われ、大変嬉しい気持ちが致しました。

また、両陛下は、53年前に定礎されたインド国際センター（IIC）も御訪問になりました。同センターの御訪問について、天皇陛



チェンナイで学生達の歓迎を受けられる天皇皇后両陛下

下は、インドへの御出発前に発せられた御感想の中で、「先の訪問時、私どもが建設の儀式に携わったインド国際センターは立派に完成し、運用されており、この度、再び訪問することになっています。かつて外務大臣の時にお会いしたムカジー大統領閣下やシン首相に再びお会いすることとともに、この度の訪問で楽しみにしていることの一つに挙げられます。」と述べておられました。12月3日にIICを御訪問になった両陛下は、53年前の御訪問の際のお写真や定礎を記念する石碑などを御覧になり、当時の御記憶がより鮮明に呼び覚まされた御様子で、大変感慨深げに、また大変懐かしそうに、笑みを浮かべて眺めておられました。

今回の御訪問では、両陛下は、公式行事以外にお二人でお過ごしになられる時間をとても大切にされていたようにお見受けしました。インド再訪を心から楽しみにされていた両陛下にとって、行事の一つ一つの印象を大切にされ、お二人で過去の御記憶に照らし合わせられながら、今回の御訪問をじっくりと楽しんでいる御様子が伺われました。

インド側も、この度の両陛下の御訪問に万全の体制で臨んだことを記しておきたいと思います。事前準備の段階では、アシュワニ・クマール前法務大臣が対日関係首相特使に任命され、訪日して日本政

平成25年12月2日（火）

インド大統領閣下主催晩餐会における天皇陛下のご答辞（大統領官邸）

日印国交樹立60周年を迎えた機会に、大統領閣下の御招待により、皇后と共に貴国を訪問できましたことを、誠に喜ばしく思います。今夕は私どものために晩餐会を催してくださり、また、ただ今は大統領閣下から丁寧な歓迎の言葉を頂き、深く感謝いたします。

私は、53年前、昭和天皇の名代として、ブラサド大統領の我が国御訪問に対する答訪として皇太子妃と共に初めて貴国を訪問いたしました。ブラサド大統領、ラダクリシュナン副大統領、ネルー首相より手厚いおもてなしを頂き、またネルー首相により開かれたレッド・フォートにおけるデリー市民の大会を始めとして、訪れた各地において人々から温かく迎えられたことが懐かしく思い起こされます。皇后はかつて学生時代にネルー首相の「父が子に語る世界歴史」に出会っており、この旅でネルー首相と度々席を共にしたことは、今も忘れ難い思い出となっていることと思います。

貴国と我が国とは地理的に離れ、古い時代には両国の間で人々の交流はほとんどなかったように考えられます。しかし、貴国で成立した仏教は6世紀には朝鮮半島の百済から我が国に伝えられ、8世紀には奈良の都には幾つもの寺院が建立され、仏教に対する信仰は盛んになりました。8世紀には、はるばるインドから日本を訪れた僧菩提僊那(ぼだいせんな)が、孝謙天皇、聖武上皇、光明皇太後の見守る中で、奈良の大仏の開眼供養に開眼導師を務めたことが知られています。この時に大仏のお目を入れるために使われた筆は今なお正倉院の宝物の中に伝えられています。

古代におけるこのような例を除き、次に貴国の人々と我が国の人々との間で交流が盛んに行われるようになるのは、我が国が200年以上続けてきた鎖国政策を改め、諸外国と国交を開くことにした19世紀半ば以降のことです。第二次世界大戦前、我が国を訪れた貴国

の詩人タゴールは、我が国の人々に深い敬意をもって迎えられました。私どもは先の訪問で、コルカタのタゴールハウスを訪問しましたが、タゴールが作詞作曲したインドの国歌がインドの楽器の伴奏で美しく歌われるのを聞いたことを、記憶にとどめています。

前回の貴国訪問の旅はこのコルカタ訪問に始まり、ムンバイ、デリー、アグラ、プタガヤ、パトナ等、かなり広い地域にわたりました。私どもは二人ともまだ20代半ばの若さであり、この国の深さを十分に知るには程遠くありましたが、この旅で当時のブラサド大統領始め、独立当時の国の指導者たちと接し、この国の来し方を学ぶとともに、この方々の民主主義、国際主義、さらには非暴力を旨としたガンジーの思想の流れをくむ平和主義を理想とする国造りへの高い志に触れたことは、今日もなお私どもの中に強い印象として刻まれています。

この度の旅行では、前回行くことのできなかつたインド南部のチェンナイを訪れます。インドの多様性を知る上で、更なる経験を持つこの機会を楽しみにしています。

終わりにになりましたが、貴国議会が年ごとの8月、我が国の原爆犠牲者に対し追悼の意を表してくださることに対し、国を代表し、とりわけ犠牲者の遺族の心を酌み、心から感謝の意を表します。

この度の私どもの訪問が、両国国民の相互理解を更に深め、信頼と友情の絆を一層強める一助となることを願いつつ、ここに大統領閣下並びに令嬢の末永い御健勝と、貴国国民の幸せを祈り、杯を挙げたいと思います。

(宮内庁HPより)

府側との調整を行いました。11月30日のデリー空港到着時、政府専用機から降りられた両陛下は、親日家で両陛下とも数多くお会いになっているシン首相夫妻の出迎えを受けられました。シン首相が外国の賓客を空港に出迎えることは極めて希なことであり、この度の両陛下の御訪問に対するシン首相自らの思い入れの強さとインド政府としての破格の歓待の姿勢を示すものでした。また、両陛下の接伴大臣としてクルシード外務大臣が任命されましたが、多忙を極める現職の外務大臣が接伴大臣を務めることは特筆すべき歓迎ぶりと言えます。さらに付言すれば、インド政府は、チェンナイでの両陛下下用のお召車とすべく、デリーからチェンナイに防弾車を空輸したほどでした。両陛下の訪れる先々には多くのインドの人々が集まり、各種の報道機関が連日両陛下の御動静を報じ、まさに国を挙げての歓待ぶりに強く印象づけられました。

12月2日、すがすがしい晴天の下で催された大統領官邸での歓迎式典は、大国インドを象徴する、誠に厳かで格式が高く、また大変華麗なものでした。歓迎式典の朝、クルシード外務大臣が宿舎に両陛下をお出迎えになり、お召車に陪乗して案内役を務めました。大統領官邸の正門に到着された両陛下のお召車は、礼砲が鳴り響く中、深紅の衣をまとった数十騎の騎馬隊に警護されながらゆっくり

と大統領官邸の広大な敷地内に進まれました。お召車から降りられた天皇陛下は、ムカジー大統領の出迎えを受けられ、その後、赤い絨毯の上を閱兵台にお進みになり、君が代、そしてインド国歌の演奏の後、陸、海、空の儀仗隊を巡閲になっておられました。陛下は、威厳に満ち、また、隊員の一人一人の労をねぎらうように、ゆっくりと歩を進めておられました。同日夜に催されムカジー大統領主催晩餐会は、大統領官邸内の壮麗なバンケットホールにおいて、約90人が一つの長テーブルに着席する大々的なものでした。インド側からは、多くの国会議員や日本企業とのビジネスに積極的に取り組む企業経営者、日本や日本語の研究者など、これまでの日印関係強化の功労者ともいべき多くの方々が出席されていました。また、チェンナイでもロサイア・タミル・ナド州知事主催の午餐会が催され、ジャヤラリタ州首相のほか、州の政財官の要人なども出席し、100名規模の大規模なものでした。

インド外務省は、天皇皇后両陛下の御訪問に先立ち、ホームページにおいて、53年前の皇太子同妃両殿下としての御訪問の際の動画映像を一般に公開しました。画像はもちろん白黒映像でしたが、ブラサド大統領やネルー首相とともにオープンカーで市内をパレードされ、ニューデリーの市民から熱烈的な歓迎をお受けになったことや



マハトマ・ガンジーの墓所、ラージ・ガートで花輪を捧げられる天皇皇后両陛下

タージマハルや地方の村を御訪問になった御様子が鮮明に伝わってくる映像集でした。この動画は、日本国内での報道でも使用されたと承知していますが、インドの主要テレビ局による報道の中でも使用され、インド国民にとっても、今回の両陛下の御訪問が53年ぶりの再訪であること、日印両国の友好親善にとって今回の御訪問が極めて大きな意義を有することなどがわかりやすく報じられる素地となりました。

両陛下の御移動の際、沿道には日の丸とインド国旗が掲げられ、インド市民が、手旗で両陛下を歓迎する姿も見られました。また、生花をモザイクのように組み合わせて両国の国旗をかたどった大きなオブジェやマリーゴールドの花をつなぎ合わせた装飾など、大変手の込んだ趣向も見られました。

日本とインドの間には、仏教の伝来に遡る文化的・精神的なつながりがあり、また、インドの人々は大変強い親日感情を有しています。戦後の日本の混乱期にはインドから寄贈を受けた象が敗戦にうちひしがれる子供たちに夢を与えました。私自身、小学2年の時に終戦を迎えましたが、日本中が絶望の深淵に沈む中で、インドから象が贈られたというニュースに接し、大変嬉しく思ったことをよく

日本とインドの間には、仏教の伝来に遡る文化的・精神的なつながりがあり、また、インドの人々は大変強い親日感情を有しています。

覚えています。インドの人々は、日本の文化と明治維新以降の日本の近代化の取組に敬意を表し、日本の先端技術を賞賛し、インドの人々にとって「好きな国」の上位には常に日本が位置します。インド議会は、例年8月に日本の原爆犠牲者を追悼するため黙祷を捧げ、また、昭和天皇御崩御の時には政府と国民が数日間の喪に服したと伺っています。

日本とインドの間には、このような国民レベルの交流と相互理解という強い基盤が存在しています。政府間でも、2000年8月に私が日本の首相として10年ぶりに訪印してからの両国政府首脳の緊密な交流を軸として、政治、経済、文化等の幅広い分野で着実に協力関係が進展しています。この度の天皇皇后両陛下のインド御訪問は、昨2012年に国交樹立60周年の節目を迎えた日印関係において、両国国民の心の親密さをさらに近づけ、両国の友好親善関係を大いに発展させるものと確信しています。我々日印協会といたしましても、今後ますます日印両国の友好関係が深まり、両国が相携えて発展して国際社会に貢献出来るよう、一層励んでいく所存です。

なお、最後に、この度の御訪問では全行程を通じて良好な天気にも恵まれたことを御紹介したいと思います。特に、現在雨期に当たるチェンナイでは前日まで強雨があり、天候が心配されましたが、両陛下の御訪問中は一滴の雨も降りませんでした。これも両陛下のお氣持が天に通じられたものと思って感謝にたえないことでした。

天皇皇后両陛下訪印記念切手：両陛下滞在中に発行される

2013年11月30日から12月5日まで日本の天皇皇后両陛下がインドを訪問しました。これを記念し、インド郵政局はインドの世界遺産クトゥブ・ミナールと、東京タワーが並び立つデザインの20ルピー記念切手を2013年12月5日に発行しました。

外国要人の訪印を記念した郵便切手が発行されるのは、インドの切手収集の歴史の中でも非常に珍しい事です。



天皇皇后両陛下に記念切手を贈呈するタミルナドゥ州知事

2014年1月26日 インド共和国記念日パレードを見学する安倍晋三首相と昭恵夫人



安倍総理大臣のインド訪問

安倍晋三総理大臣と昭恵夫人は、第65回インド共和国記念日式典に主賓として出席するため、2014年1月25日から27日の日程でインドを訪問しました。日本の首相がインドの共和国記念日式典に参列するのは今回が初めての事でした。訪印中の1月25日、安倍首相はインドのマンモハン・シン首相との印日年次首脳会談に臨みました。会談の中でシン首相は、日本はインドの東方政策における中心的な国である、と述べました。さらに、日本はインドの経済成長、また、アジアと世界に平和、安定、そして繁栄をもたらすというインドの目標においても重要なパートナーである、と発言しました。力強い経済回復を遂げつつある日本と、変貌し、急速な成長を続けるインドとの、共通の価値観や利益に支えられたパートナーシップは、アジア地域に利する、と表明しました。シン首相は、また、貨物専用鉄道西回廊やデリームンバイ産業大動脈、インド工科大学ハイデラバード校計画、そして計画中のチェンナイ・ベンガルール産業大動脈など、近年インド政府が着手した世界レベルのインフラ整備を目指すという野心的な計画において、日本は特別なパートナーである、と述べました。

安倍首相は、「日本とインドの関係は、世界中のどの2国間関係より、大きな可能性を持っています。今回の私の訪印が、戦略的グローバルパートナーシップに基づく日印関係をより強固にする促進力となるよう期待します。」と述べました。

安倍首相は訪印中、下記セミナーにおいて演説を行った：

- i. 科学技術セミナー
- ii. 品質管理セミナー



2014年1月25日 ニューデリーで印日首脳会談に臨む両国首相

インド共和国記念日レセプション

駐日インド大使主催のインド共和国記念日レセプションが、2014年1月29日12時からホテルオークラで催されました。小野寺五典防衛大臣、石原伸晃環境大臣、西村康稔内閣府副大臣、岸信夫外務副大臣、武田良太防衛副大臣を含む大臣・副大臣7名と、23名の国会議員の皆様等、数多くの要人が駆けつけて下さいました。

また、日印協会会長の森喜朗元首相、日印友好議員連盟の町村信孝会長、公明党の山口那津男代表、民主党の海江田万里代表等の要人の皆様のご臨席も賜りました。

他にも各国外交官、武官、日本政府関係者、報道関係者や在日インド人コミュニティ等から、500名以上の方がご出席になり、大盛況に終わりました。



駐日インド大使と小野寺五典防衛大臣



駐日インド大使と石原伸晃環境大臣



駐日インド大使と森喜朗元首相



駐日インド大使と町村信孝日印友好議員連盟会長



駐日インド大使と公明党 山口那津男代表



駐日インド大使と民主党 海江田万里代表



駐日インド大使と岸信夫外務副大臣

印日科学技術交流

2013年9月2日から7日の日程で、インド核エネルギー省から、インド原子力学会(INS)副会長V. ヴェヌゴパール博士、グルシャラン・シン学会事務局長、元インド原子力公社(NPCIL)社長のS.A. バルドワジ博士ら代表団が来日しました。一行は、9月2日から5日まで、水戸と青森の原子力研究施設を訪問し、日本原子力学会(AESJ)の年次会合に出席しました。会合では発表も行いました。2013年9月6日には、在京インド大使館において、学会間協力協定の調印式に出席しました。ディーパ・ゴパラン・ワドワ駐日インド大使が見守る中、インド原子力学会副会長のV. ヴェヌゴパール博士と日本原子力学会堀池寛会長が協定に署名しました。調印式では、インド大使館科学技術担当参事官チャンドラム・シヴァジ博士が出席者を歓迎し、ワドワ大使が開会の言葉を述べました。調印式には、日本人原子力研究者や日本原子力学会、世界原子力発電事業者協会の代表者ら30名あまりが参列しました。

1. インド原子力学会(INS)と日本原子力学会(AESJ)との協力協定調印



写真.:インド原子力学会と日本原子力学会との協力協定調印式。ディーパ・ゴパラン・ワドワ駐日インド大使立ち会いの下、インド原子力学会副会長 V. ヴェヌゴパール博士と日本原子力学会会長堀池寛博士が学会間協力協定に署名した。



写真: 2013年9月6日に東京のインド大使館で行なわれたインドバイオテクノロジー局(DBT)と産業技術総合研究所(AIST)との協力協定調印式で挨拶をするチャンドラム・シヴァジ 科学技術担当参事官

2. インドバイオテクノロジー局(DBT)と独立行政法人産業技術総合研究所(AIST)が 共同研究所(DIALAB) を設立

インドバイオテクノロジー局(DBT)局長のK. ヴィジャイ・ラガヴァン博士、インド科学技術局(DST)国際地域協力部部長サダナ・レリア博士、両局の財政顧問、アヌラダ・ミトラ女史が、バイオテクノロジー局と独立行政法人産業技術総合研究所(AIST)との覚書締結のために、2013年10月2日から5日の日程で来日しました。DBTのラガヴァン局長と、AISTの中鉢良治所理事長が協力協定の覚書に署名しました。また、ラガヴァン博士は、AISTつくば本部において、両局の共同研究所となるDIALABの開所式に臨みました。



写真: 2013年10月3日 AISTつくばセンターでのDIALAB共同研究所開所式に臨むラガヴァン博士

調印式では、インド大使館科学技術担当参事官チャンドラム・シヴァジ博士が出席者を歓迎し、ワドワ大使が開会の言葉を述べました。調印式には、日本人原子力研究者や日本原子力学会、世界原子力発電事業者協会の代表者ら30名あまりが参列しました。



インド外務省関係者と面会する山陰インド協会経済視察団メンバー

山陰インド協会

日本の西側に位置する島根、鳥取の山陰両県。中でも松江、出雲、安来、米子、境港市を中心とした「中海・宍道湖・大山圏域」は、圏域人口が約66万人と山陰両県人口の5割を占め、日本海側でも新潟、金沢に次いで3番目の規模を誇る人口集積地です。

豊かな自然環境と神話の時代から連綿と続く歴史・文化遺産も数多く残っている同エリアは、充実した都市機能を持った中核的な都市圏として発展しています。各地とつなぐインフラ整備も進み、地理的に近い韓国、中国、ロシアとの海運交易が盛んな日本海側屈指の重要港湾・境港をはじめ、国際線・国内線が就航する米子空港、出雲空港などの空路、山陰自動車道をはじめ中国横断自動車道岡山米子線、尾道松江線など陸・海・空の交通ネットワークが整備されています。

こうした環境の中、山陰インド協会は2013年6月、ワドワ駐日インド大使閣下を招いて発足しました。きっかけは、インド哲学、比較思想学の世界的権威である中村元博士の業績を顕彰する中村元記念館が2012年10月、松江市八束町（大根島）に開館したことです。地元経済界を中心に「この機会にインドと文化経済交流を」との気運が高まり、協会設立の運びとなりました。

会員数は現在、企業・個人合わせて約180団体・個人。会員企業の業種は、IT、土木建設、環境保全、食品製造、機械・部品製造、再生可能エネルギー関連など多様で、様々なアプローチでインドとの経済交流を見据えています。また、協会は山陰両県知事や両県選出の国

會議員、島根県友好交流議員連盟、県會議員、市長、大学学長、商工会議所会頭ら約45人が名誉役員としてバックアップ。産官学連携の協会となっています。

協会活動は、ホームページやメールマガジン「ナマステ山陰」の発行をはじめ経済セミナー開催、経済視察団派遣など。島根・鳥取両県出身のインド駐在者ともネットワークを広げながら、インドと山陰、インドと日本との友好的な経済文化交流の推進を目指しています。

11月には、協会初の経済視察団を結成。古瀬誠団長(山陰インド協会会長)率いる総勢21名の視察団が、11月2日にインドへ旅立ちました。視察団はニューデリーとチェンナイを訪問し、インド政府外務省、商工省、そして環境省の担当者と面会、交流しました。

11月6日には、インド企業との事業協力拡大の可能性を探るため、インド商工会議所連合会(FICCI)の役員と面会しました。初めての訪印だったにも関わらず、会員企業の中には、現地企業との事業協力の可能性を見出した企業もあり、会合は成功に終わりました。

今回の訪問では、経済以外の分野での協力関係も構築されました。島根大学とインド科学大学バンガロール校の間で、大学間協定が結ばれ、学術的・文化的交流や協力を促進することになりました。

私たちの活動が、両国関係の理解と親善の増進に寄与するとともに、山陰両県の産業経済及び地方文化の向上発展につながれば幸いです。

海運大臣の来日

G.K. ヴァサン海運大臣率いる代表団が2013年11月8日から11日の日程で来日しました。滞在中、ヴァサン海運大臣は、太田昭宏国土交通大臣を表敬訪問しました。両大臣は、2国間関係の力強い発展に寄与するため、これまでに培われた交流や港湾間交流を通じ、海事分野における協力や交流をより強化することで合意しました。



太田昭宏国土交通大臣を表敬訪問するヴァサン海運大臣



横浜港の港湾設備を視察するヴァサン海運大臣

繊維大臣の東京・大阪訪問

2013年11月24日から26日の日程で、カヴル・サンバシヴァ・ラオ繊維大臣を団長とする繊維代表団が、繊維関連製品の2国間貿易協定の為に来日しました。代表団メンバーとして、手織産業発展局局長、アパレルトレーニングデザインセンター(ATDC)所長、国立ファッション技術研究所(NIFT)所長、繊維委員会理事(研究部門)が大臣に随行しました。東京では、日本繊維製品品質技術センター(QTEC)、日本繊維機械協会(JTMA)や日本のカジュアルウェア大手ユニクロ、そして日本繊維産業連盟の代表者らと面会し、大阪では、日本繊維輸入組合大阪事務所を訪問しました。

ラオ繊維大臣立ち会いの下、国立ファッション技術研究所(NIFT)と学校法人文化学園との間で両校間交流の促進を目的とした覚書が、また、アパレルトレーニングデザインセンター(ATDC)と日本の工業ミシナーメーカーJUKI株式会社との間では、製品特化型訓練プログラムや製品開発イノベーションセンターについての協力に関する覚書がそれぞれ取り交わされました。



インド国立ファッション技術研究所(NIFT)と学校法人文化学園との覚書調印式に出席したK. S. ラオ インド繊維大臣と文化学園 大沼淳理事長



JUKI株式会社とアパレルトレーニングデザインセンターとの覚書書署名式に出席したインド繊維大臣K. S. ラオ博士と代表団メンバー

JICA インド工科大学を支援

インド工科大学ハイデラバード校は、インド政府が2008年に新たに設立した工科大学8校の内のひとつです。印日政府は綿密な話し合いを重ね、インド工科大学ハイデラバード校について、JICAのODAによる支援を行う事で同意しました。この歴史的な協力プログラムは、合同研究プロジェクトや学術交流、ハイデラバード校キャンパスの改良等の大学支援策を集約し、インドと日本の間に長期的な関係を構築することを目指しています。JICAは、SATREPS(S & T Research Partnership for Sustainable Development: 地球規模課題対応国際科学技術協力)を通じて合同研究プロジェクトを支援します。『インドにおける自然災害の減災と復旧のための情報ネットワーク構築に関する研究』(DISANET)と名付けられたプロジェクトが、インド工科大学ハイデラバード校とインド国内の国立研究所、そして、日本の慶応大学の協力で進められています。また、日本では外務省が中心となり、『日本インド工科大学ハイデラバード校コンソーシウム』が設立されました。このコンソーシウムは、日本政府から学術界、産業界といった利害関係者で形成された包括的な組織で、インド工科大学ハイデラバード校との協力促進を目的としています。

最近、インド政府内閣経済委員会は、日本政府のODAとインド人材開発省によるインド工科大学ハイデラバード校共同プロジェクトを承認しました。プロジェクト総費用、177億6500万ルピーの内、150億1720万ルピーはJICAのODAによって賄われ、インド人材開発省が27億4770万ルピーを拠出する事になります。

インド：火星周回軌道探査機打ち上げ成功



—— ユーデリー：“マンガラヤーン”、としても知られているインドの火星周回軌道探査機（MOM）が、2013年11月5日午後2時38分、シュリハリコタのサティッシュ・ダワンスペースセンターから無事、打ち上げられました。マンガラヤーンはインドにとって初めての惑星間飛行計画で、もし成功すれば、インド宇宙研究機関はロスコスモス、NASA、欧州宇宙機関について4番目に火星に到達した宇宙機関となります。45億ルピー（726億USドル）という極めて安価、かつ低コストで実行されたこの計画は、同時に宇宙技術分野におけるインドの自立性を立証する事でしょう。

特筆すべきは、今回初めてインドのロケットが地球の引力の外へと送り出されたという点です。今回の打ち上げは、インドに火星の軌道に周回軌道探査機を打ち上げ、実験を行える程の技術があるという事を実証することになります。極軌道打ち上げロケット（PSLV）- C25は火星周回軌道探査機を、極めて正確に地球の楕円軌道上に投入しました。今後探査機は300日間飛行し、2014年に火星の軌道に到達する予定です。探査機には、360度のパノラマ撮影をするカメラや、鉱物調査を行う機器が搭載されています。さらに、火星にどのような大気が存在していたかを測定する機器や、惑星上の水の量を計測できる機器も装備しています。中でも、火星になんらかの生命体が存在していた場合、どのような生命体があったのかを示すメタンガスの有無を確認する調査が最も重要視されています。

第12次5カ年計画には、33の衛星発射計画と25のロケット発射計画等、58の宇宙計画が盛り込まれています。今回の発射で最も目を引いた点は、前は18分だった打ち上げ所要時間が、今回は44分とPSLVとしては最も長い時間を要した事、そして、今回がPSLVを用いた25回目の発射計画であった点です。PSLVはこれまで25回打ち上げられ、24回連続で成功しています。

シークレットが明るみに： ビクトリアズ・シークレット等の アメリカの大企業 バンガロールの技術に関心を寄せる

文：TNN シルバ・パドニス

バンガロール：国際的なセクシー・ランジェリーブランド、世界最大のビールメーカー、最大の食品・農産物会社やアメリカでホームセンターをチェーン展開する企業。これらの企業には一つ共通点がある—4社ともバンガロールの技術力を利用して、事業の見直しを図ろうと考えている、と企業動向の専門家は言う。

ランジェリーブランドのビクトリアズ・シークレットを運営するリミテッド社は、バンガロールに自社初となるグローバル事業支援戦略室(GIC)を立ち上げる。インドのGICでは、より良い製品の開発や顧客満足度の改善を目的として、膨大な量の顧客や小売店データの解析を行う予定だ。

年間100億ドルを売り上げ、PinkやBath & Body Works、Henri BendelやLa Senza等のブランドを傘下に持つアメリカのリミテッド社は、インド外国投資促進委員会の承認を求めている。

同社は委員会からの承認を待つ間、マンニャタ・テック・パークに用地を確保した。

リミテッド社にメールで問い合わせをしたが、回答は得られなかった。

他にも年間550億ドルを売り上げる住宅リフォーム・生活家電チェーンのロウズや、年間売上1370億ドルの食料品大手カーギル、140億ドルの製薬会社バクスターといったアメリカ企業3社が、近々バンガロールにGICを設立すると見られている。ロウズにとって、インドのGICは高度な技術を要する作業を行う戦略拠点となる。

情報筋によると、先週、世界最大のビールメーカーの経営トップがバンガロールを訪れ、GICの普及拡大に貢献した全国ソフトウェア・サービス企業協会(NASSCOM)の代表者やIT分野をリードする経営者達と面会したとのことだ。

キャプティブセンターとも呼ばれるGICは、当初、設立費用が安いという理由からインドに作られていたが、今では重要性を増し、企業活動に欠かせない存在になっている。

現在、カルナータカ州政府は、NASSCOMや、元ターゲット・インディア社長のラリット・アフジャ氏率いるANSRコンサルティングと協力し、バンガロールをインドのGIC集積地にすべく50Kプロジェクトを推進している。

キャプティブセンターとも呼ばれるGICは、当初、設立費用が安いという理由からインドに作られていたが、今では重要性を増し、企業活動に欠かせない存在になっている。NASSCOMのK. S. ヴィシュワナタンGICイニシアチブ委員会副委員長は、「GICは企業にプロセスの変化や、効率化を促すといった影響をもたらしている。また、企業収益に貢献できる新しい事業の開拓や、新興市場や国内市場向け製品の開発も行っている」と述べた。

世界には1600のGICがあり、その内の43%がインド国内におかれている。インドのGICは、インドのIT-BPO産業全体の収入の19%に当たる2000億ドルを稼ぎだし、雇用の15%を供給している。最初にGICの設立に動き出したのは、シティバンク、スタンチャートやHSBCといった国際的な金融機関だったが、以降、他の分野の企業も追随を始めた。

現在、カルナータカ州政府は、NASSCOMや、元ターゲット・インディア社長のラリット・アフジャ氏率いるANSRコンサルティングと協力し、バンガロールをインドのGIC集積地にすべく50Kプロジェクトを推進している。このプロジェクトは今後5年間でバンガロールに25のGICを誘致し、50,000人分の雇用を創出しようとするものだ。

「企業の中には、アメリカのウィスコンシン州ミルウォーキーやオハイオ州シンシナティといった、人材の少ないアメリカの内陸部に拠点を構えているものもある。中には、事業転換を試みている企業もいる。企業にとって事業転換は戦略的に緊急性の高い要素であるため、第3者のIT事業者に外注することが出来ないのだ」と、アフジャ氏は言う。

通常、GICは戦略的な業務を担い、社内業務外注業者は、業務能力の拡張を得意とする。アフジャ氏は、「最近の法改正によって、企業は自社によるデータ管理が義務付けられ、第3者IT事業者の管理下に置く事が出来なくなった」とも述べた。

(タイムス・オブ・インディア 2014年2月12日)

インドの世界遺産：ハンピの建造物群

下記の通り、インドには数多くのユネスコ世界遺産が存在しています。これから本誌、『インド便り』では、毎号、インドの世界遺産を紹介してまいります。今回はその中から非常に有名なハンピの建造物群をご紹介します。

文化遺産

1. アジャンター石窟群
2. エレファンタ石窟群
3. エローラ石窟群
4. チャンパネール・パーヴァガドウ遺跡公園
5. ファテプル・シークリー
6. ハンピの建造物群
7. マハバリプラムの建造物群
8. ジャイプールのジャンタル・マンタル
9. カジュラホの建造物群
10. デリーのクトゥブ・ミナールとその建造物群
11. チャパトラパティ・シヴァージ・ターミナス駅
12. パッタダカルの建造物群
13. デリー 赤い城の建造物群
14. コナラクのスーリヤ寺院
15. 大チョーラ朝寺院群
16. アグラ城塞
17. ビンベトカの岩陰遺跡群
18. ブッダガヤの大菩提寺
19. インドの山岳鉄道群
20. サーンチーの仏教建造物群
21. タージ・マハル廟
22. ラジャスタンの丘陵要塞群
23. ゴアの教会群と修道院群
24. デリーのフマユーン廟



タージ・マハル廟

自然遺産

25. カジランガ国立公園
26. ケオラデオ国立公園
27. マナス野生生物保護区
28. ナンダ・デヴィ国立公園及び花の谷国立公園
29. スンダルバンス国立公園
30. 西ガーツ山脈

(特に記載がない場合、写真はジェフリー・ウー氏の撮影によるもの)

アジャンター石窟群



エレファンタ石窟群

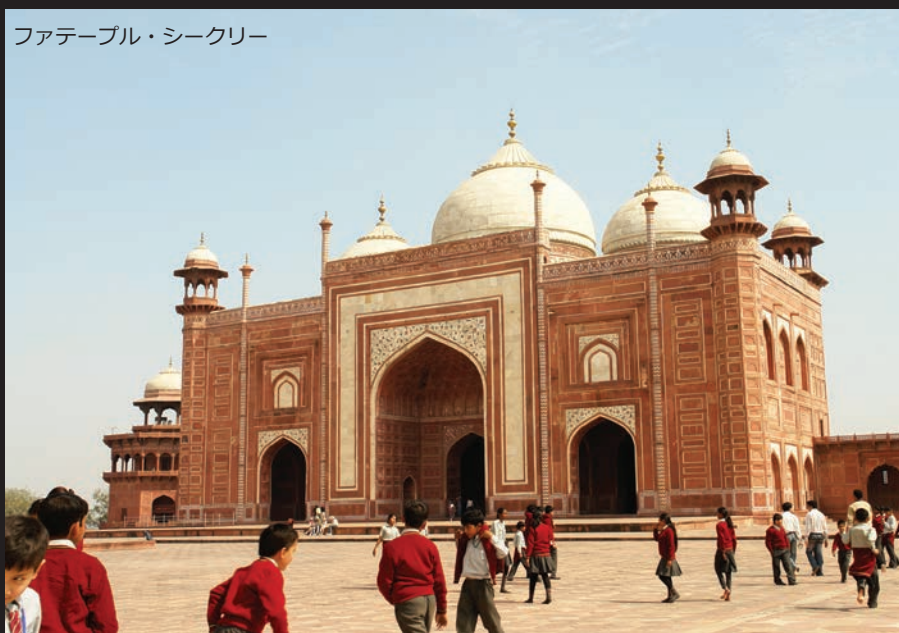


エローラ石窟群

チャンパネール・パーヴァガドゥ遺跡公園



ファテプル・シークリー



ハンピの建造物群





マハバリブラムの建造物群



ジャイプールのジャンタル・マンタル



カジュラホの建造物群



デリーのクトゥブ・ミナールとその建造物群



チャバトラパティ・シヴァージ・ターミナス駅



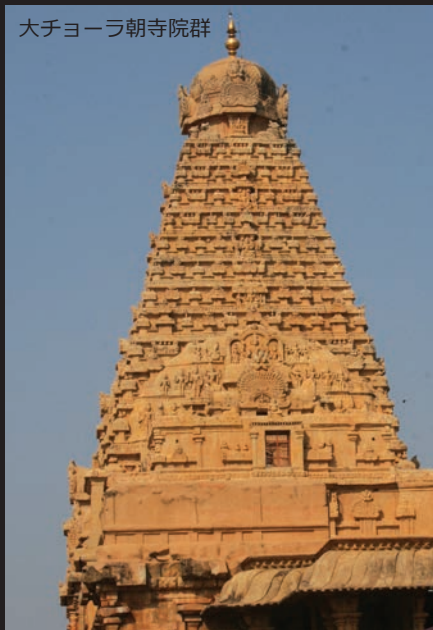
パッタダカルの建造物群 サンガメシュワラ寺院

デリー 赤い城の建造物群 ディワーニ・カース



コナーラクのスーリヤ(太陽)寺院

大チョーラ朝寺院群



アグラ城塞



ビンベットカの岩陰遺跡群

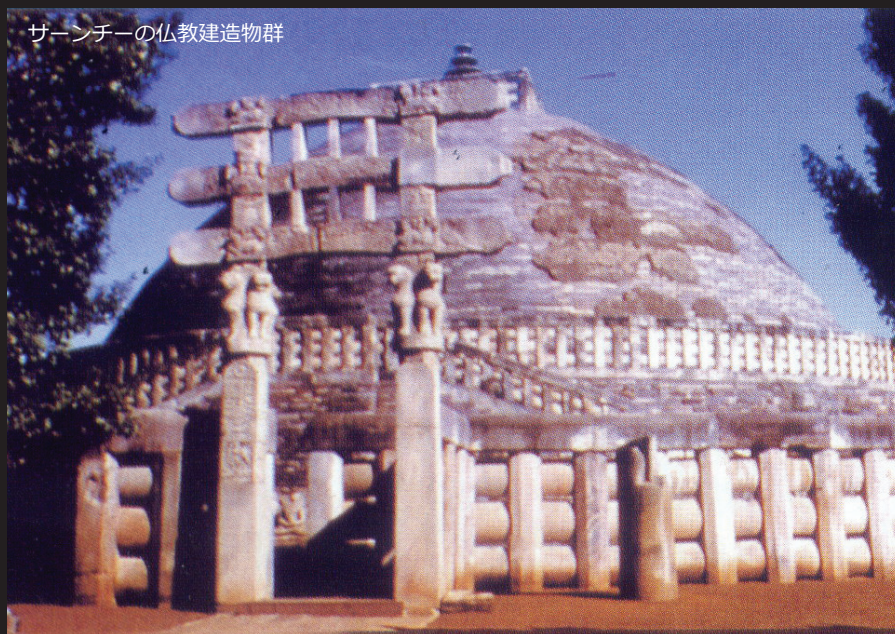


ブッダガヤの大菩提寺





インドの山岳鉄道群
ダーズリン・ヒマラヤ鉄道



サーンチーの仏教建造物群



タージ・マハル廟



ラジャスタンの丘陵要塞群



インド考古学調査局、ゴア州



フマユーン廟

ハンピの建造物群

ハンピの建造物群とは？

ハンピは歴史的、かつ宗教的な場所です。ここは14世紀から16世紀にかけて南インドに興ったヴィジャヤナガラ王国の王都でした。

ハンピの遺跡は、野外に遺跡が点在しており、さながら歴史、建築物、そして宗教の屋外博物館です。



ゴビーの衣類を盗もうとしているクリシュナ神
撮影：パッタビヒラマ寺院

25キロ㎡(10平方マイル)に渡り広がるハンピの建造物群は、巨大な寺院、宮殿、市場、水中構造物、城塞、そして膨大な数の古代の石碑の宝庫です。

丘陵地に点在する丸みを帯びた巨石や、この地域を横切るように流れる川がこの古代都市の光景を一風変わったものになっています。この風景と歴史的、神秘的な痕跡が相まって、ハンピを非の打ちどころのない観光名所になっているのです。ハンピの建造物群はユネスコの世界遺産に登録されています。

ハンピの建造物群の位置

ハンピの建造物群はインド南西部のカルナタカ州ハンピにあります。ハンピはカルナタカ州の州都、バンガロールの北350キロ(217マイル)に位置します。



ハンピへのアクセス

ハンピへの主な交通手段は車です。

次に列車、飛行機の順に利用されています。

ハンピから12キロ(8マイル)の所にあるホスピットという小さい町に最寄りの鉄道駅があります。ハンピへの主要玄関口となっており、バンガロールやハイデラバード、ゴア州のバスコダガマといった主要都市へも鉄道で行くことができます。

また、ホスピットには頻繁にバスが運行しているバスターミナルがあります。ハンピ行きのバスはここから運行しています。

直近の空港はバンガロール空港です(350キロ)

ハンピの建造物群の見どころは？

ヴィットラ寺院:ヒンドゥー教のヴィシュヌ神の化身のひとつであるヴィットラ神を祀っており、ハンピの建造物群の傑作です。敷地内には多くの礼拝所や神殿があります。礼拝所は、躍動感あふれる彫刻が施された素晴らしい柱がある事で知られ、中でも叩くと反響音がする柱が有名です。本殿の正面には、車輪のついた巨大な石のチャリオットがあります。この寺院には、石のチャリオットが置かれた幅の広い通りの他に、小さいながらも凝った装飾が施された神殿が多数あります。

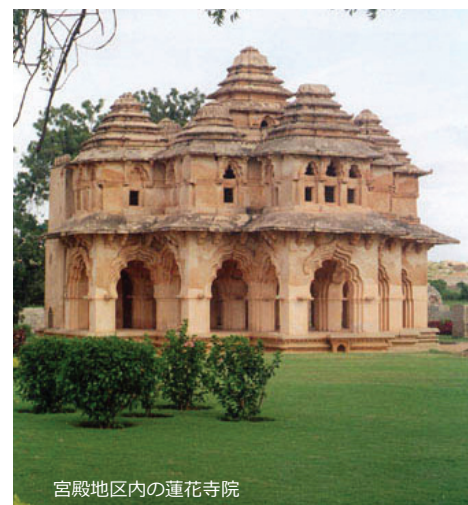


石のチャリオット:この『石のチャリオット』は、ハンピの観光名所と言われています。チャリオット、と呼ばれていますが、実際はチャリオットを模した寺院で、ヴィットラ寺院の敷地内にあります。

チャリオットは長方形の台座の上に作られており、台座の全側面には、神話で語られている戦いの様子が彫られています。チャリオットは単に表面に車輪の模様が彫られた台座の上に置かれているわけではありません。チャリオットの巨大な車輪は車軸やブレーキ等、細部にいたるまで本物そっくりに彫りこまれています。車輪には、同心円状に花の模様が施されています。

ヴィルパークシャ寺院: 河辺にあるヴィルパークシャ寺院にはヒンドゥー教の破壊の神が祀られています。ここは、インドで最も古い時代から(7世紀)、現在に至るまで実際に礼拝されている寺院の一つとして知られ、観光客の他、巡礼者も多く訪れます。敷地内には、神殿や多くの柱に支えられた礼拝堂、そしていくつもの巨大な塔門があります。ヒンドゥー教が果たす役割を、見ることの出来る優れた寺院の一つでもあります。

宮殿地区: 宮殿地区には、古代の王達の邸宅があり、周囲を城壁で囲まれています。内部には広大な空間が広がっており、王が毎年、王国の威厳を示す軍事パレードを観閲したとされるマハナヴァミ等の荘厳な建造物の遺構が残されています。その他にも宮殿の基礎の遺構や地下寺院、水中構造物等が多く見られます。



ハザラ・ラマ寺院:この寺院は王の私設寺院でした。ヴィジャヤナガラ王朝時代に建てられた他の寺院と違い、外壁に素晴らしい彫刻が施されていることから、特別な寺院とされています。外壁には、ラーマヤーナ(ヒンドウ教の叙事詩)の物語が、まるで絵巻物のように、見事に刻み込まれています。神殿内部には4本の磨かれた柱があり、そこにも神を主題にした彫刻が彫られています。



ハザラ・ラマ寺院

象小屋:この建物は、王家の象舎として使われていました。ドーム状の屋根を持ち内部は、いくつかの房に分けられていました。ひとつひとつの房は、象が2頭入れる程の大きさでした。精巧な塔の真下にある中央ホールは、儀式音楽隊が使用していたとみられています。



ハンピの象舎

ラクシュミ・ナラシンハ寺院:ハンピの建造物群最大の彫像、ナラシンハ像があります。ナラシンハ神は、セシャという巨大な7つ頭の蛇のトグロの上に座っています。蛇の頭はまるで頭巾のようにナラシンハ神の頭部を覆っています。ヨガのポーズのように足を組んで座るナラシンハの膝には、膝を支えるベルトがかかっています。時に、このナラシンハ神は、ウグラ・ナラシンハと呼ばれます(ナラシンハが恐怖の形相になった時を指す)ウグラ・ナラシンハという名前は、突き出した目玉とその表情から付けられました。

ナラシンハ(現地の言葉で半人半ライオンの意)は、ヴィシュヌ神の10の化身(アヴァター)の一つです。

もともと、ナラシンハ神の膝の上には、彼の妻、ラクシュミ神の像がありました。しかし、ヴィジャヤナガラ王国の滅亡の引き金となった襲撃で深刻なダメージを受けたとされています。損傷を受けた後もラクシュミ神像の残骸はナラシンハ神の膝の上に残っていたとされていましたが、想定される元の大きさにも関わらず見つかっていません。恐らく細かく砕かれ、撒かれ

ナラシンハ像





ダサラ・ディッパ または マハナヴァミ・ディッパ

ダサラ・ディッパは宮殿地区で最も高い建造物で、敷地内に入ると真っ先に目に入ります。遠くから見ると、一見、何の変哲もない背の高い四角いステージに見えますが、近寄って見るとそうではない事がわかります。ダサラ・ディッパは、巨大な四角い板のような建造物を3層も重ねて作られているのです。

てしまったとみられています。しかし、女神の手部分が、まるでナラシンハ神を抱きしめるように像の背中部分に残っています。残された手には、爪や指輪までもが見事に表現されています。

ダサラ・ディッパ または マハナヴァミ・ディッパ:ダサラ・ディッパは宮殿地区で最も高い建造物で、敷地内に入ると真っ先に目に入ります。遠くから見ると、一見、何の変哲もない背の高い四角いステージに見えますが、近寄って見るとそうではない事がわかります。ダサラ・ディッパは、巨大な四角い板のような建造物を3層も重ねて作られているのです。

ダサラ・ディッパの頂上へは、2つの階段から登る事ができます。正面（東向き）に設置されている階段の両側には、象や馬といった様々なモチーフが彫られています。頂上からは、敷地内外の素晴らしい景色を眺める事が出来ます。建造物の背面には、2つ並んだ階段があります。この階段は恐らく儀式の最中に使用されたとみられています。観光客は正面の階段から登り、裏側から降ります。

ステージ状の建造物の両脇には、溝のような模様といくつもの彫像が彫られています。両脇の壁の下部にある彫刻パネルが特によく知られています。このパネルには、王室の行事の様子や市民や王の暮らし、外国からの使節団や狩の様子等が彫られています。

ハンピ探索の仕方

ハンピの建造物群に点在する岩にまつわる物語も楽しめる徒歩か自転車がお勧めです。

自転車で

もし、ハンピの建造物群の歴史や文化、自然を最大限に楽しむのであれば、自転車が最適です。ハンピを徹底的に探索するのであれば、自転車と徒歩で回る事をお勧めします。

詳細は:

http://asi.nic.in/asi_monu_whs_hampi.asp |
<http://hampi.in/>
<http://karnatakaturism.org/>

スワミー・ヴィヴェーカーナンダと日本

文：ヴェーダーンタ協会 スワミー・メーダサーナンダ



スワミー・ヴィヴェーカーナンダ

マハトマ・ガンディー、ラービンドラナート・タゴール、ジャムシェドジ・タタを含む同時代や後世の偉大なインド人だけでなく、レオ・トルストイ、ジョン・ロッカフェラー、ロマン・ロランなど才気ある西洋人もまたスワミーの影響を受けた。

序文

1863年カルカッタにて生まれたスワミー・ヴィヴェーカーナンダは、カルカッタ大学を卒業し、現代インドの著名な神秘主義者シュリー・ラマクリシュナに出会った。シュリー・ラマクリシュナはスワミー・ヴィヴェーカーナンダにとって友人、思想家、そして指導者となった。スワミーは後にすべてを放棄して僧侶となり、若干25歳で至高の真実を悟った。そして師から受け継いだ十字架を背負い、精神的真実と智慧を説き、様々な慈善事業を立ち上げて人類に奉仕することに全生涯を捧げたのであった。

スワミーは1893年シカゴで開催された第一回宗教会議において「宗教の調和」と題した講演を行ったことから、西洋世界でその名を知られるようになった。西洋からインドへ戻ると、スワミーは扇動的な演説を繰り返し行い、同胞に対し、長年の眠りから目覚めて立ち上がり、行動し、インドを偉大な国家へと変貌させよと呼びかけた。そして、「真実／自己の実現」と「人類への奉仕」という理想に基づいた、僧侶と一般人の双方を対象にしたラマクリシュナ・ミッションを設立した。このミッションと多くの支部は現在インド各地で様々な精神的、文化的、慈善的な活動に積極的に関与している。

スワミーは地上でのミッションを完遂し、1902年、39歳という若さで、必ず滅びる運命にある肉体を離れた。

今日、一部の人はヴィヴェーカーナンダを著名ではあるが凡庸なヒンズー教僧侶と見なしている。精神世界に興味を持たない人々は、彼から学ぶことはないか、時代遅れとみなしがちである。しかし多くの人々は、社会のあらゆる層に属する人々がヒンズー教徒であるか否か、またインド人か非インド人であるかに関わらず、スワミーの教えから何かを学び、恩恵を得ることができると考えている。

ヴィヴェーカーナンダの独特な人格

ヴィヴェーカーナンダの宗教観や思想は大変重要であり、高く評価されている。彼は貧困層や女性に影響を及ぼす教育の問題や東洋と西洋の調和や世界文明についても独自の考えや思いを持っていた。またスワミーは電撃的で閃きに満ちたメッセージで人々を魅了できる演説家であり、彼の言葉はそれを聞いた者に一生消えない印象を残した。「スワミーについて知る最いい方法は、彼についての文章を読むのではなく、彼自身の文章を読むことである」との指摘があるが、これはまさに的を射ている。スワミーの著作や記録された言葉からは、彼の魅力や勢い、勇気、精神的権威、怒りや愉快さを含めた人格をたいへん強く感じることができる。スワミーは、平凡な職業的僧侶とは多くの意味で全く異なる並はずれた僧侶であった。このことは、評伝や著作から引用した以下の文章からも明らかである。

「彼は自分自身を信じない無神論者であった。昔の宗教は、神を信じない者と無神論者と呼んだ。新しい宗教は、自分自身を信じない者を無神論者と呼ぶ」。

「私は、寡婦の涙をぬぐえない、また、孤児の口にパンを入れることもできない宗教や神を信じない。私は、私を現世で幸せにできない神を信じない。そんな神が来世で生まれ変わった私の面倒を見てくれるとは思えないからだ」。

「私を何度でも生まれ変わらせ、幾千もの苦難を与えたまえ。存在する唯一の神、信仰する唯一の神、あらゆる魂の総体である神を、私が崇拝できるように。何と言っても、邪悪な私の神、悲惨な私の神、あらゆる人種、あらゆる生物の種のなかで最も貧しい私の神こそが、私の特別な崇拝の対象なのだから」

スワミー・ヴィヴェーカーナンダ一般的な影響

マハトマ・ガンディー、ラービンドラナート・タゴール、ジャムシェドジ・タタを含む同時代や後世の偉大なインド人だけでなく、レオ・トルストイ、ジョン・ロッカフェラー、ロマン・ロランなどオーストリア人もまたスワミーの影響を受けた。没後100年を経た今も、インド社会のあらゆる層に属するインド人の多くは、スワミーの教えから、より崇高な人生を生きるための閃きを得ている。彼の言葉は、遠い昔に発されたものであるが、いまだに重要な意味を持ち、教訓として有効なので、以前より複雑性を増し、課題が山積する現代においてもインドの大統領や首相をはじめとする要人に頻繁に引用されている。インド政府は自国の若者にヴィヴェーカーナンダを理想のロールモデルかつ英雄として提示するため、彼の誕生日である1月12日を国民の記念日である「若者の日」と指定すると宣言した。

ヴィヴェーカーナンダの訪日

ヴィヴェーカーナンダは、1893年にシカゴで行われた歴史的な宗教会議に向かう途中日本に立ち寄り、神戸、大阪、東京、横浜といった都市に三週間滞在したため、日本とは特別な繋がりを持っている。シカゴへの残りの旅路につく前には、横浜のホテルに泊まった。

スワミー・ヴィヴェーカーナンダは単なる宗教的指導者ではなく、時代の予言者でもあった。このため、彼が日本を含む外国を訪ねるといことは、重要な意味を持っていた。しかし残念なことに、日印関係についての一部の記事や書籍、展示などにおいてはスワミーの訪日に関する言及が皆無であることからわかるように、この側面については認識されていない。さらに、スワミーの日本滞在については、たとえば誰に会って、何を見たかなどといった具体的な事実はほぼ知られていない。こういった事柄に関する唯一の情報源は、彼が7月10日に滞在した横浜のオリエンタル・パレス・ホテルで記した手紙である。この手紙の中で、スワミーは日本についての印象を簡潔に描写し、日本の特質を高く評価し、日本人がいかにインドの若者を鼓舞できるかについて意見を記している。

以下はこの手紙からの引用である。

「日本人は世界で最も清潔な国民である。すべてが整然としている。ほとんどの道は広く、まっすぐで、平らに舗装されている。小さな家はまるで竈のようで、ほとんどの町村の背後には松に覆われ

た常緑の小さな丘が続いている。背の低い、肌の白い、上品な装いをした日本人は、動き、態度、所作、すべてが絵画のように美しい。日本は絵のような国である！ ほとんどの家には裏庭があって、日本式に小さな植え込みや芝生、人造の池や川、小さな石橋が見事に配置されている」。

ここに書かれた描写は現代に通じるものもあるが、いくつか変化した事もある。たとえば、最近の世代は身長が伸びており、日本人は「背が低い」とは最早描写できない。スワミーは明治維新を経て中世国家から近代国家へと変貌を遂げた日本に大いに感銘を受け、母国も同じような状況になって欲しいと心から願った。スワミーは横浜からカナダ・ブリティッシュコロンビア州のバンクーバーまで「インドの女帝号」に乗って船旅をしたが、乗り合わせた乗客の中には著名なインドの実業家ジャムシェドジ・タタがいた。

この初めての西洋への旅から帰国した後、私的な場や、記事にもなった演説においてインドの復興について語る時、スワミーはアメリカや他の西欧諸国ではなく、同じアジアの同胞である日本を例に挙げることが多かった。インドは日本を復興の模範とすべきと感じたからである。インドの若者には日本と中国に行くよう助言したが、特に日本がいかなる変貌を遂げて偉大な国家になったかを見てくべきだと強調した。

ヴィヴェーカーナンダと岡倉

19世紀後半に活躍した著名な日本人美術史家の岡倉天心は、来日していた美術学生でスワミーの熱心な弟子であったジョゼフィーヌ・マクロードからヴィヴェーカーナンダのことを教えられ、その独特な人格と業績について知った。実際、岡倉に、インドへ行ってヴィヴェーカーナンダに会い、日本を再訪し初来日では実現しなかった演説を行って日本人を鼓舞して欲しいと要請するよう説得したのはマクロードだった。岡倉がこれに同意したのは三つの理由があったと思われる。第一に、岡倉はマクロードがそれほどまでに賞賛するヴィヴェーカーナンダに会ってみたいと強く思った。第二に、仏教に深い関わりを持つ美術史家として、岡倉はインドにおける仏教遺物がどのような状態にあるかを見て確かめ、仏跡を訪ねてみたいと願った。第三には、明治政府によって迫害された大乘仏教の信者である天心は、ヴィヴェーカーナンダのような偉大な、しかも仏陀に対し大いなる愛と尊敬を抱いている人物が日本に来て演説を行い、その言葉と偉大な人格や仏陀への愛で日本人に影響を及ぼしてくれることを願ったのである。マクロードは、ヴィヴェーカーナンダの西洋における影響力について、天心に語っていた。

マクロードは岡倉の訪印に関してヴィヴェーカーナンダに必要な連絡を取り、面会する手はずを整えた。この面会で岡倉は、日本を再訪してほしいとヴィヴェーカーナンダに懇願した。1902年1月の第一週、岡倉はついにカルカッタに到着し、6日、カルカッタから程近い地に設立されて間もないラーマクリシュナ・オーダーの本部ベルル・マートでスワミーと面会し、温かく迎えられた。

スワミーはその後岡倉をブッダガヤとヴァラナシを巡る旅に連れていったが、その詳細についてはここでは省略する。重要なのは、スワミーの健康状態の悪化のため、日本への再訪が実現しなかったという点である。ヴィヴェーカーナンダと岡倉の人生に対する姿勢には根本的な違いがあり、おそらくそれが徐々に表出したことから、両者の関係がこれ以上親密になることはなかったのでは



岡倉天心

ないかと思われる。そして二人の関係は、岡倉のインド到着のたった4か月後に、スワミーの夭逝によって終わった。スワミーの体調が悪化した頃に来日を要請したもう一人の人物が明治天皇だったことは、実に驚くべきことである。

またスワミーが、どのような状況下であるかはわからないが、最期の日となった1902年7月4日に次の発言をしたことは特記すべきである。スワミーは突然、「日本のために何かをしたい」と言ったのであった。これは少なくとも、亡くなる間際まで、スワミーの思考に日本が含まれていたことを示している。

日本におけるスワミー・ヴィヴェーカーナンダの影響

来日時、スワミーはある無名の僧侶と知り合い、彼に感銘を与えたと推測される。この事は、当時日本に住んでおり、スワミーと一緒に横浜を発ち、同じ船でバンクーバーまで長い船旅をした著名なインド人実業家のジャムシェドジ・タタの発言に裏付けられている。タタが後にシスター・ニヴェディタに語ったところによれば、スワミーと知り合った日本人の僧侶は、スワミーを自分たちが崇拝する仏陀に匹敵する人物と評したという。

しかしながら、スワミーが日本により大きな影響を与えるきっかけとなったのは、フランスの小説家でノーベル賞を受賞したロマン・ロランが書いたヴィヴェーカーナンダの優れた評伝の邦訳出版である。しばらく後の1958年と1964年には、ヴィヴェーカーナンダ生誕100周年を記念して、ラマクリシュナ・オーダーの僧侶による巡回講演が行われ、スワミーに関する人々の意

識と興味はいくらか高まったが、その影響は限定的であった。しかし、これをきっかけに、日本では大阪と東京（後に逗子に移転）にあった二つのヴェーダーンタ協会のグループが力を結集した。これらのグループがスワミーに関する書籍を出版し始めたことから、ヴィヴェーカーナンダの影響力は本格的に広がり始めた。1984年、逗子のヴェーダーンタ協会（www.vedanta.jp）はラマクリシュナ・オーダーと公式に提携し、オーダーの僧侶の指導のもとに本格的なラマクリシュナの組織として機能し始めた。スワミーの「日本のために何かをしたい」という末期の願いは、ついに実現したのである。日本ヴェーダーンタ協会は、ラマクリシュナとヴィヴェーカーナンダに関する書籍をこれまで40冊出版しており、そのうち9冊はヴィヴェーカーナンダに関する、またヴィヴェーカーナンダが著した書籍である。いくつかの書籍は常に需要があるため、日本ヴェーダーンタ協会の書店やホームページだけでなく、丸善や紀伊国屋といった大手の書店でも扱われている。

日本ヴェーダーンタ協会の活動は、インド政府が在東京インド大使館を通じて毎年交付する補助金により支援されている。

1995年以降、スワミーの生誕記念祝賀行事が逗子の日本ヴェーダーンタ協会本部や、現在行われているこの式典と同様に東京で毎年開かれており、日本各地で大学教授や僧侶による、ヴィヴェーカーナンダや関連したテーマについての講演が幅広く行われるようになった。スワミーに関する展示も、東京の代々木公園で毎年行われる大規模なフェスティバル「ナマステ・インド」やインド大使館の美しく現代的なギャラリー、大阪の公立施設など、様々な場所で開催されるようになった。また、ヴィヴェーカーナンダを始めとする偉大な人々の閃きに満ちたメッセージがメールマガジンなどで定期的に発信されている。

また、多数の会員を擁する日本ヨーガ療法協会はヴィヴェーカーナンダのヨーガ関連の教えをヨーガ研究教本に取り入れている。

結論

これまで述べてきたすべての要素は、ヴィヴェーカーナンダの知名度と付随する影響の拡大に貢献してきた。日本社会のすべての部門に属する少なくとも数千人の人々がヴィヴェーカーナンダについて、その内容に差はあるにしても、何らかの知識を持っている。一部の人々は、ヴィヴェーカーナンダに惹きつけられ、彼の教えから理想的な人生を生きるための閃きを得ている。

本年はスワミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕150周年に当たり、祝賀式典が日本を含む世界各国で開催されている。日本ヴェーダーンタ協会はこの歴史的な年を記念するため、在東京インド大使館、在大阪・神戸インド総領事館の協力のもとにいくつかのプログラムを開始した。スワミー・ヴィヴェーカーナンダと彼の残した素晴らしいメッセージを深く尊敬する日本国の安倍晋三首相閣下は、2007年インド国会にて行った演説で、1893年シカゴ宗教会議においてスワミーが宗教の調和について語った講演からいくつかの文章を引用した。また安倍首相は日本におけるスワミーの生誕150周年記念式典にもお祝いのメッセージを寄せた。

日本の最高指導者のスワミーへの賞賛の念が、この国の一般の人々がスワミーについて意識を高め、彼についてもっと学びたい気持ちを持つきっかけとなることを願っている。

インド料理： マサラ・チャイの作り方

インド料理は、日本で最も人気のある外国料理の一つです。これから、インド料理を自宅で作ってみたいという日本の友人の皆様の為に、自宅で簡単に作れるインド料理をご紹介します。今回は、インドの国民茶、マサラチャイの作り方です。



Recipe for Indian Masala Chai

インド料理は、その芳醇で複雑な風味で良く知られています。複数のスパイスを調合し、健康に良いとされる『マサラ』がこの風味を作りだしています。マサラチャイはインド人に欠かすことの出来ない飲み物で、朝晩には気持ちをすっきりさせてくれます。また、食事後の締めくくりの一杯としても親しまれています。

マサラチャイ

材料（2杯分）

- 水 1½カップ
- 牛乳 ½カップ
- 紅茶葉 2匙
- 砂糖（お好みの量）
- 生姜パウダー、または乾燥生姜 ½ 匙
- スパイスパウダー ½匙（乾燥粉碎クローブ2に対しカルダモン1の割合）
- シナモンパウダー ¼ 匙(お好みで)

作り方

1. ソースパンに水と生姜パウダー、スパイスパウダーをいれ、沸騰させ、スパイスの香りがたつまで煮る。
2. 牛乳、砂糖、茶葉を加え、3分間沸騰させる。
3. 軽く混ぜ、鍋を火から下ろし、茶濾しを使ってカップかティーポットに注ぐ。

カレーの『改善』

サンジブ・シンハ

先月、日本でカレーショップをチェーン展開する企業の経営者と対談をする機会をいただいた。対談中、私は、この企業がインド市場への進出を計画している事を知った。

社長は、いかに自社のカレーが高品質で安全基準を満たし、いつも変わらぬ味で提供されているかを力強く語ってくれた。日本のカレーの品質の良さについては、まったく同感である。

私も時々日本のカレーを食べる。日本のカレー文化は、インドの多彩な食文化のほんの一部分ではあるが、食べるたびに美味しく、健康的であると感じる。日本のカレーは、材料の生産から実際に提供されるまで、実に衛生的に管理された環境で調理されている。また、日本のカレーは、京都でアレンジされ、今や本場フランスでも人気となっている京フレンチを思い出させる。

対談の中で、私達は、いかに日本の自動車産業がアメリカの自動車技術を基に発展し、今日のように、アメリカ市場で大きなシェアを持つまでに至ったかについても話し合った。外国からの知識を基に日本が成功した例は数多くある。その成功の理由は簡単だ。

まず、日本には、専門性と完璧を求める文化がある。これは賞賛されるべき文化だ。誰もが、自分の専門に集中し、極めようと努力する。

同時に、日本の産業・経済構造は非常に綿密に構築され、入念に練られた計画に沿って改善が進められる。前出の日本のカレーショップチェーンでは、厳しい基準に基づいて材料を生産・輸入し、細心の注意を払って調理し、一番おいしいタイミングを提供することなく料理を提供している。

このサプライチェーンに関わる全ての人が熱心に業務にあたり、素晴らしい結果を出す事でシステム全体が見事に機能し、いつでも健康的かつ、衛生的で美味しいカレーが提供できるのだ。逆にいえば、もし、このシステムの一部でも想定外の動きをすれば、システム全体がめちゃくちゃにな



まず、日本には、専門性と完璧を求める文化がある。これは賞賛されるべき文化だ。誰もが、自分の専門に集中し、極めようと努力する。

る。しかし、日本でこのような事が起こる事は稀である。

だが、これで、日本が完成品の輸出を得意としてきた理由がわかるだろう。

海外生産においても、日本企業は大抵の場合、全ての関連サービス企業と共に進出する。例えば、日本の主要自動車メーカーは、自動車部品輸送サービス業者を伴ってインドに進出してきた。そして、1980年代、90年代には、多くの日本車メーカーが日本国内の部品メーカーや関連サービス企業を伴って中国へ進出し、現地で日本の産業構造をほぼ再現したような格好になった。

しかし、現在では、技術が普及したことで、より安いコストで部品や関連サービスを提供できる現地企業も育ってきている。このような企業の台頭は、海外、特に、製造プロセスが目まぐるしく進化し、予期せぬ出来事が頻発する工業新興国で事業展開している日本企業にとって課題となる。

例えば、日本以外の外国自動車メーカーは、現地部品メーカーを上手く利用し、コスト優位性を実現している。現地部品メーカーが力をつけてくると、日本が日本国内で構築した高度な産業構造の優位性が失われてしまう。結果、この数十年間、日本企業は、先行きが見づらい環境での事業運営という、これまで経験したことのない課題に、準備不足のまま取り組むことを余儀なくされてきたのだ。

難しい課題ではあるが、ダイナミックかつ総合的な経営を行う事によって乗り越えられるだろう。日本式の美味しいカレーがインドで食べられるようになるのを楽しみにしている。

(サン・アンド・サンズ・グループ代表)

(この記事は、Nikkei.comに掲載されたサンジブ・シンハ氏の寄稿記事の複製です)

Holi, the festival of colours. To know more, log on to www.incredibleindia.org

Throw colours on others

Add colour to your life

Find what you seek

Incredible!ndia